

中国語の“過₂”について

武村朝吉

要約

本稿では、先ず「経験」が“マクロ的視点”によって捉えられていることを指摘し、そこから得られる知見を仮説として提示した。次に、その仮説を踏まえて中国語の“過₂”の定義を再考した。その結果、“過₂”の文法的意味を、“広義の過去”と“狭義の過去”を時間基盤とした場合はともに「経験」を表わし、“最近の過去”を時間基盤とした場合は事象の「有無」に焦点を当てる、の三つに集約した。最後に、それによる事例の解釈も試みた。

§1.0. 現代中国の共通語である普通話（以下「中国語」）の動態助詞の一つである“过”は“过₁”と“过₂”に分けられ、それぞれ「動作の完了」¹と「嘗てある種の出来事が発生したこと、あるいはある種の経験を経たこと」²を表すとされている。その二分法は従来から多くの先行研究で踏襲され、“过₁”と“过₂”の文法的意味の差異や、“了₁”・“了₂”並びにその他関連語句との共起の状況等に関する実証的な研究が盛んに行われている。しかし、多くの知見の蓄積にもかかわらず、“过₁”と“过₂”の境界線が未だ不明確であることを始め、関連語句との共起関係についてもはっきりしない部分があり、“过”についてのより踏み込んだ研究が求められている。

本稿では、豊富な先行研究の成果を踏まえ、演繹法的手法を用いて“过₂”を中心に議論を進め、それと関連した形で、統語論的な、関連語句との共起関係についても言及したいと思う。

§1.1. 先行研究

先ず“过₂”の定義、並びに定義と密接な関係があると思われる関連語句との共起状況等についての記述を見てみたいと思う³。

1. “过₂”の定義について

- ◇「“过”はある種の体験あるいは経験を表す。」王力 (1943・1944), p. 80.
- ◇「“过₂”は嘗てこのような出来事があったことを表す。」「“过”は嘗てある種の出来事が発生したこと、あるいはある種の経験を経たことを表す。」「否定形は“没(有)+动+过”である。」吕叔湘ら (1980), p. 216.
- ◇「“过”は嘗てある種の出来事があったことを表す。」孔令达 (1986), p. 272.

- ◇「“过₂”は動作あるいは状態が嘗て発生したことを表す。」张晓铃 (1986), p. 48.
- ◇「我々は“过₂”の意味を嘗てそうであったことと概括する。すなわち嘗てある種の動作が発生したこと、あるいはある状態が存在したことを表わす。」刘月华 (1988), p. 6.
- ◇「“过₂”は動詞あるいは形容詞の後に用いて、嘗てある種の動作が発生したこと、あるいはある状態が存在したことを表すが、動作の進行あるいは状態の存在は既にある。」房玉清 (1992), p. 17.
- ◇「“过”のアスペクト操作は〈終結点到着〉や〈終結点通過〉である。…中略…後者は、事態における限界のあり方にかかわらず、その事態における最終局面の終結点を通り過ぎてしまう、という操作である。その結果、終了した時点が近ければ、しばしば『完了』として解釈される。一方、終了した時点が遠い過去であったり、あるいはその終了した事態が当事者にとって何らかの特別な意義を持っていたりすると、しばしば「経験」として解釈されるのである。」劉綺紋 (2006), p. 273.

2. “过₂”と時間の関係について

“过₂”を伴う動詞・形容詞が表わす出来事の完了あるいは状態の存在は、過去、現在、未来いずれの時間の事象なのか。上掲“过₂”の定義に見られるように、“过₂”は嘗てそうであったことを表わしている」としている点でほぼ一致しているが、“过₂”と時間の関係についての説明は研究者によって差が見られ、要約すると以下ようになる⁴。

- ◇吕叔湘ら (1980) は、「動詞+过₂」はみな過去のことを表し、文中時間に言及しなくてもよいが、言

及する場合は明確な時間を表す語句を用いなければならない。」としている。p. 216.

◇張曉鈴(1986)も「“過₂”は“過去”に発生したことにしか使えない。」としているが、その“過去”を発話者の観察点の違いによって、“現在を起点とする広義の過去(以下“広義の過去”)」と、“過去のある時点から見た過去(以下“狭義の過去”)」の二つに分けている。p. 49, 56.

◇孔令達(1986)は、「“過₂”は常に“過去”の時間と関連する」としながらも、その“過去”を①発話時以前、②将来のある時点から見た過去、③出来事が過去と仮定できるもの、の三種類に分類した上で、その内①が“過₂”の基本的な用法であるとしている。p. 272.

◇劉月華(1988)は、「“過₂”は嘗てそうであったことにしか使えない(必然的に已然である。）」としている。p. 7.

◇劉綺紋(2006)は、「“過₂”は〈終結点通過〉のAspect操作によって、常に先行性を示して出来事パーフェクトの機能を担う。」と説明している。なお、パーフェクトについては、春木(2001)の「パーフェクトのAspect的意味がそのTense的意味に由来し、参照時の状態・属性とのかかわりにおいてそれ以前の事態を捉えることを表す。」という見解を踏まえており、劉綺紋(2006)の言う“過₂”のパーフェクト機能は、参照時から遡ってそれ以前の事態を捉えていることが分かる。p. 31, 287.

§ 2.0. “過₂”についての定義の再考

“過₂”の定義を改めて考えるに際して問題になるのは、中国語の母語話者の語感に照らした時の「完了」と「経験」の違い、あるいは中国語学習者の側から言えば、Tenseの「過去」とAspectの「完了」と「経験」の違いである。なぜならば、Tenseの「過去」として表される出来事は、無論「完了」している出来事に他ならず、その「完了」した出来事が未来の特定の時点において回想された場合「経験」として認識されるのもまた必然だからである。例えば、日本語においてTenseの「過去」として表される文の場合：

(1) 私は昨日北京ダックを食べた。

(2) 私は昨日腕を骨折した。

上掲(1)(2)でTenseの「過去」で表されている「北京ダックを食べた」と「腕を骨折した」は、「完了」した出来事に他ならず、評価の優劣に関係なく、未来の特定の時点において回想され「経験」として認識される。結局のところ、「完了」と「経験」は、Tenseの「過去」で表される事象の中に既に包含されていると言える。このように考えると、“過₂”の文法的意味の定義は、まず文法概念としてのTenseの「過去」とAspectの「完了」の違い、そしてAspectの「完了」と「経験」の違いを明確に区別し、それらを踏まえたところ求めるべきだと思われる。

§ 2.1. 先ず、Tenseの「過去」とAspectの「完了」の違いについては、劉綺紋2006が、Reichenbach(1947), Smith(1997²), Comrie(1976), Маслов(1984), 工藤(1995)等を引いて、単純過去と出来事パーフェクトの違いとして以下のように説明している⁵。

単純過去と現在パーフェクトとの相違点は、参照時(R)の位置が異なる、という点である。単純過去の場合、参照時を過去の事態時に置いてその過去の事態を捉える。それに対し、現在パーフェクトの場合、参照時を発話時である現在においてその過去の事態を捉える。(R: Reference Time)

§ 2.2. 次に「完了」と「経験」の差異について考えてみたいと思う。§ 2.0. で述べたように、Aspectの「完了」と「経験」は必然的連続性をもってTenseの「過去」で表される事象の中に既に包含されている、いわば事象的プロセスである。果たして、その両者は如何に区別し得るのか。両者を区別する基準を、「完了」した出来事の中から強い印象を伴った心象として蘇るものが分離・抽出されて「経験」として認識するなどとする見解は、母語話者が何の問題もなく両者を区別し得ている実情を説明するにはやや説得力に欠けている感が否めない。その実情からは、むしろ、それらを区別する基準は「強い印象を伴った心象として蘇るもの」というような曖昧なものではなく、より具体的な指標の存在なしには説明がつかないことを物語っているように感じさせられる。

例えば、日本語における「経験」表現の場合、「～したことがある」の「コト」を伴った構造がAspect

トマーカーの役割を果たしている。動作の完了を表す「～した」の部分が連体修飾語として後ろの「コト」を修飾する構造は、その修飾構造が形成される時点で、それが表す事象が名詞化される。そのように名詞化された過去の事象が既成事実として前面に押し出されることによって、日本語の「経験」表現が表す事象は心象的にも「完了」とは明確な区別がつくものになっていると理解できる。中国語の“过₂”に関しても、中国語の母語話者が“过₂”を用いることに何ら困らないという実情からすると、日本語の「経験」表現の場合と同様、“过₂”が表す事象にも他とそれを分ける何らかの明確な指標が存在している可能性が高いことが窺える。

そこで、今一度先行研究における“过₂”の定義を見てみると、その文法的意味を解き明かす鍵となると思われる、中国語ネイティブ話者の語感を反映しているであろう、以下の文言・説明が顕れていることに気が付く⁶：

- ① 「“过₂”は嘗て～たことを表す。」 吕叔湘ら(1980) 他, p. 216.
- ② 「“过₂”の否定形は“没(有)～过”である。」 吕叔湘ら(1980), p. 216.
- ③ 「“过₂”と共に起する“曾经”は動作と状態が“比較的遠い過去”において完了あるいは存在したことを表すが、……。」 房玉清(1992), p. 19.
- ④ 「“过₂”は動詞あるいは形容詞の後に用いて、嘗てある種の動作が発生したこと、あるいはある種の状態が存在したことを表すが、動作の進行あるいは状態の存在は既がない。」 房玉清(1992), p. 17.
- ⑤ 「もし動詞あるいは形容詞が表す動作、状態が変えられないものである場合は、“过₂”を使うことができない。」 刘月华(1988), p. 12.
- ⑥ 「…Vが“过₂”を伴う場合、“不特定性”がある。…“V+过₂”でVの表す同種の動作、行為あるいは状態の回数は1回以上である。」 (孔令达1986). p273.

上掲①の「“过₂”は嘗て～たことを表す。」から“过₂”の文法的意味は「経験」を表わすものであるとほぼ推測できる。②の“过₂”の否定形である“没(有)……过₂”を、構造的に“没(有)+[……过₂]”と解釈すると、“没(有)”が否定する[]内の部分、すなわち“[……过₂]”（「嘗てある種の出来事が発生した、あるいはある種の経験を経たことがある」）が、日本語の「～した

ことがある」と意味構造が酷似している状況も、言語の種別を超えた認知活動の普遍的共通性を示すものとして、“过₂”が「経験」を表わす根拠の一つであると言えよう。

ここで、更に踏み込んで「経験」について考えてみたいと思う。①の「嘗て」と③の「“比較的遠い過去”において」は、通常パーフェクトの定義では類似する語句・表現が現れないという事実と対照性を示しており、論理的に考えると、その対照性の中に「完了」した出来事から「経験」を分離・抽出する視点が存在している可能性が高いということになる。この両者の間に共通性を求めるならば、それは過去を振り返る“マクロ的視点”となるのではないか。それと併せて、④の“过₂”の表す事象が現在においては既がないという指摘からは、“过₂”の表す事象が参照時の状況との間に断絶、すなわち“不連続性”を現わし、その事象が名詞的に捉えられていることを示唆していると理解できる。以上の2点から着想すると、“过₂”が過去の事象を捉える視点は“マクロ的視点”であり、その視点は過去の事象を名詞化された既成事実として捉えているものと考えられる。

なお、④の“过₂”の表す事象の“不連続性”は、“过₂”の表す過去の事象と参照時の状況との間に必然的に変化が発生することを暗示しており、それを逆説的に理解すると、⑤が指摘するように、「経験」として捉えられる過去の事象を表現する動詞あるいは形容詞は、“可変性”又は“反復性”を持ったものに限られる、ということになる。同時に、⑤の“可変性”及び“反復性”の結果から、過去の事象を表す同種の動作、行為あるいは状態の回数は1回以上であるということになる。

筆者は、“マクロ的視点”を以下のように理解する。

そもそもコミュニケーションは、詳細な情報のやり取りだけで構成されるというのは無理があるのであって、実際的には、マクロ的に情報を確認し合う触りの部分と、ミクロ的に情報を緻密に詰めて行く部分、その両者から織り成されていると考えた方がより自然だ。その両面において物事を捉える視点が、“マクロ的視点”と“ミクロ的視点”となろう。一方の“マクロ的視点”の特徴は、参照時から遠く離れた時間軸上の過去を限定された一定の時間幅（以下「マクロ時間」）の断片として切り取り、その断片上の事象を既

成事実として端的に“点”として捉えることであり、他方の“ミクロ的視点”の特徴は参照時から近い時間軸上の過去の事態を詳細に“線”的に捉えることであると考える。

§ 2.3. 以上の考察から、以下に「経験」についての仮説を提示し、参照時から顧みた過去の事象が“マクロ的な視点”によってどのように捉えられるか、箇条書きにしてみたいと思う。

仮説（その1）：「経験」とは、強い印象を伴って記憶された過去の事象が想起されて浮かび上がる心象である。その心象は、参照時から“マクロ的視点”で過去を振り返って“マクロ時間”の断片を切り取り、その断片上の事象を既成事実として端的に“点”として捉えられたものである。

- ① 起点と終点を持つ動作性動詞の完了も、起点と終点が重なる瞬間動詞の動作の完了も、切り取られた断片上の“点”としてとして認識される。
- ② 動作の完了の結果として現れる状態も、圧縮され、切り取られた断片上の“点”として認識される。
- ③ 形容詞が表す状態の存在も、圧縮され、切り取られた断片上の“点”として認識される。
- ④ 動作の完了も、動作の完了によって現れる状態も、状態の存在も、全てが切り取られた断片上の“点”として認識されるので、その結果として、参照時における“線”として認識される状況との間に断絶を生ずる、つまり“不連続性”を現わすことになる。
- ⑤ 従って、「経験」に言及する際「完了」はその前提条件であって、焦点の当てられる核心は、“点”として認識される完了した動作、動作の完了によって現れた状態、あるいは存在した状態の「有無」である。
- ⑥ 更に、「経験」の“不連続性”のため、参照時に強い影響を及ぼした過去の事象を参照時の状況と関連付けるということは不可能である。そのことは「経験」が「パーフェクト」とは異なった範疇であるということを示している。「パーフェクト」が参照時との“直接的な”関連付けであるとするなら、「経験」は参照時との“間接的”な関連付けであると言える。

- ⑦ 「経験」として捉えられる過去の事象は、“可変性”と“反復性”を持った事象に限られる。
- ⑧ 「経験」として捉えられる過去の事象の発生回数は1回以上である。

§ 2.4. 次に、張曉鈴(1986)の“広義の過去”及び“狭義の過去”，並びに孔令達(1986)の“三種類の過去”について考察を進めたいと思う。

1. 張曉鈴1986の“広義の過去”及び“狭義の過去”について

既述のように、「経験」を捉える視点は“マクロ的な視点”に相違ないと思われるが、論理上、時間軸上のどこを起点として“マクロ時間”の断片を切り取るかということが問題となってくる。それは、「経験」を捉える“マクロ的な視点”が持つ時間概念と、通常認識されるところの「経験」が包含する時間的概念、この両者間の矛盾である。「経験」が“マクロ的な視点”によって捉えられるという見解は、一方においては、その視点が“マクロ的”であるが故に、その時間概念は張曉鈴(1986)の“狭義の過去”と合致するが、他方においては、通常「経験」の時間概念として認識されるところの現在を起点とする“広義の過去”を否定できないという矛盾を残している。その矛盾はどのように解決されるのであろうか。思うに、それは遡行的認知のメカニズムによって解決されている。つまり、時間軸上遠い過去の事象は、“マクロ的視点”で捉えられると、切り取られた“マクロ時間”断片上の“点”として事象の「有無」に焦点が当てられるのに対し、逆に、時間軸上の距離が近いものも“点”として認識されると、“マクロ的視点”で捉えられたものと同様、切り取られた断片上の事象の「有無」に焦点が当てられる。その結果、遡行的認知メカニズムによって認識される過去の事象も「経験」の中に取り込まれ、張曉鈴(1986)の“広義の過去”という「経験」の時間概念が出来上がる。

なお、この“広義の過去”は、「経験」の重要な構成要素である“不連続性”のため参照時の状況との間に断絶を生じており、正確には“不連続性”を現わすのに必要な時間だけ参照時から過去にシフトした時点を中心として起きていると考えられる。また、その時間概念は「経験」を構成するものであるため、「経験」を捉

える“マクロ的視点”を基盤とすることが必須であり、“広義の過去”からマクロな部分である遠い過去を除外すると、もはや「経験」を構成する時間概念としての機能を失ってしまう。要するに、“最近の過去”という制限された時間幅においては、マクロ的に事象の「有無」に焦点が当てられる捉え方は存在し得ても、必ずしも「経験」とはならないことを意味する。

結局のところ、“マクロ的視点”の働きは、以下の3点に集約できる。

- ① “狭義の過去”における「経験」を捉える。
- ② “広義の過去”における「経験」を捉える。
- ③ “最近の過去”における事象の完了・存在の「有無」に焦点を当て“点”的に捉える。

2. 孔令达1986の“三種類の過去”について

時間という概念はもとより人間の観念的思考能力によって認識可能となるものなのであるから、過去・現在・未来という時間区分も現在を基点（立ち位置）とした観念上の相対的区分に過ぎない。実際のところ、観念的思考能力によって過去にも未来にも自在にシフトできるのだから、当然の結果として、それに合わせて基点も移動し、相対的時間区分も自動的にシフトすることになる。つまり、観念上、特定の過去の時点をも基点とすれば、そこを基点とする新たな相対的時間区分が出現し、未来の特定の時点をも基点とすれば、そこを基点とした新たな相対的時間区分が出現するということになる。従って、孔令达(1986)の“三種類の過去”は、挙げられた事例によって明確な例証がなされると言える。以下にその事例の一部を紹介する⁷。

① 発話時以前の過去

- ・ 从前我在舞场的时候，他很追过我一阵子。（遭遇：日出）
（昔私が踊り場にいた頃、彼は一時期私に夢中になっていたことがあった。）

② 将来のある時点から見た過去

- ・ 黑三：……回头，潘四爷，八爷醒了之后您千万别说我们到这儿来过。（遭遇：日出）
（黒三：潘四爷，八爷が後で目を覚ましたら、私達がここに来たことは決して言わないで下さいね。）
- ・ 到2000年，上过大学的人将比现在多一倍以上。（著者作）

（2000年には、大学出の者が現在の2倍以上になっていることでしょう。）

③ 出来事が過去と仮定できるもの

- ・ 如果他学过动物学，他一定知道鲸鱼不是鱼。（吕叔湘：中学教师的语法修养）
（もし彼が動物学を学んだことがあるのなら、きっと鯨が魚じゃないことは知っているでしょう。）

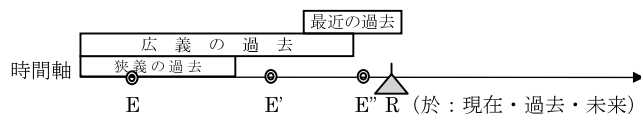
§2.5. §2.1. ~ §2.4. の考察を総合すると、以下のように“过₂”の新たな定義が見えてくる。

“过₂”の文法的な意味は、参照時以前の事象の「有無」に言及することである。その内容の詳細は以下のとおりである。

- ① “过₂”は参照時を、発話時、又は特定の過去、未来に置くことができる。
- ② “过₂”は“マクロ的視点”によって参照時以前の事象を捉える。“マクロ的視点”によって“マクロ時間”の断片を切り取り、その断片上の事象を圧縮された“点”として認識し、その「有無」に焦点を当てる。
- ③ “过₂”は“マクロ時間”の断片上の事象の“点”的「有無」に焦点を当てるため、参照時の状況との間に“不連続性”を発生させる。
- ④ “过₂”は三種のマクロ時間（“狭義の過去”，“広義の過去”，“最近の過去”）を時間基盤とする。
- ⑤ マクロ時間が“狭義の過去”及び“広義の過去”の場合、言及する事象の「有無」は「経験」として認識される。
- ⑥ マクロ時間が“最近の過去”の場合、言及する事象の「有無」は参照時の状況と“不連続性”を示す“点”的過去の事象として認識される。これは、テンスの過去と近似しているが、“不連続性”が顕在化している点で差異がある。（※本稿ではこの働きを“过₂”の文法的意味の一つとして分類するが、“过₁”に跨る可能性も高い。）
- ⑦ “过₂”によって捉えられる過去の事象は、“可変性”と“反復性”を持った事象に限られる。
- ⑧ “过₂”によって捉えられる過去の事象を表す同種の動作、行為あるいは状態の回数は1回以上である

以上の“过₂”の文法的な意味を図解すると次の図1

のようになる。



E: Event Time, S: Speech Time, R: Reference Time

図1 “過₂”と時間の関係

§ 3.0. ここでは、§ 2.5. で示した“過₂”の文法的な意味についての新たな定義を基に、先行研究で判別が難しかったいくつかの事例について解釈を試みたいと思う。

§ 3.1. 呂叔湘ら(1980)は、「動詞+過₂」はみな過去のことを表し、文中時間に言及しなくてもよいが、言及する場合は、明確な時間を表す語句を用いなければならない。」とし、下の事例を挙げている：

- ・前年我去过长城 (×有一年，我去过长城。) 呂叔湘ら(1980), p. 216.

事例中の“前年”は“狭義の過去”に属する時間概念として認識されるものであり、「経験」を構成する時間基盤となる“マクロ時間”の条件を満たしていると言える。しかし、上記に見られる、「明確な時間を表す語句」であれば良いということにはならない筈である。例えば、代わりに“2005年5月15号”や“上个星期”を考えると、前者は明確な年月日、後者は近い過去を指し、どれも“ミクロ的”で「経験」の構成要素としての“マクロ時間”の条件を満たすことができないため、用いることはできないと理解されよう。また、誤用例とされている上掲の“有一年”については、それが表す時間が“狭義の過去”，“広義の過去”の何れに属するのか感覚的に判断できず、「経験」を構成する“マクロ時間”が成立し得ないという点が、それが使えない理由となっているものと考えられる。

§ 3.2. 劉綺紋(2006)は、統語論上の共起関係によって“過₁”と“過₂”を区別できないとし、以下のような事例を根拠として挙げている⁸。

①動詞直後の“了” (以下「了₁」) は“過₂”と共起しないとする先行研究への反論

- ・虎妞，一向不答理院中的人们，可是把小福子看成

了朋友。小福子第一是长得有点模样，第二是还有件花样布的长袍，第三是虎妞以为她既嫁过了军官，总得算见过了世面，所以肯和她来往。(骆驼十七160) (ひのえ午は平素“雑院”の人々とは交際しなかったのだが、福子は例外で友達になってしまった。第一、福子は美しかった。次には彼女は例の花模様の上着を着ていた。また、ひのえ午の考えでは一度軍人さんの嫁に行ったのだから、きっと世間を見てきたに違いない。こんな女とは往来しておいたほうがいいと思ったのだった。(中山264)), p. 246.

②文末の“了” (以下「了₂」) は“過₂”と共起しないとする先行研究への反論

- ・去了大都会博览馆，看了一半，他说：“你自己去看吧，我都陪朋友看过四次了。……” (阎真493) (メトロポリタン美術館に行き、半分見たところで、彼が言った。「君は自分で見に行ってくれ。僕は友達のお伴で四回も見たんだ。……」), p. 246.

③時間副詞“已经”は“過₂”と共起できないとする先行研究への反論

- ・他已娶过，偷过；已接触过美的和丑的，年老的和年轻的；但是她们都不能挂在他的心上，她们只能是妇女，不是伴侣。(骆驼二十二208) (彼はすでに一度結婚したし——また人の妾を偷んだこともあり——美しいのも醜いのも、年寄りもわかいのも、みんな知っている。しかし、彼女らは彼の関心には上がってこないのだ。彼女らは女というだけで、一生の伴侶の条件は全然ゼロだ。(中山344)), p. 247.

思うに、§ 3.2. の①②③全てが、“過₂”の文法的意味の特徴である“不連続性”と関連している。“過₂”によって捉えられる「経験」は、その“不連続性”のため、§ 2.3. の仮説(その1) ⑥で述べたように、参照時の状況との間に“間接的”な関連付けしか持たない。つまり、“過₂”によって言及される「経験」は参照時との間接的な関連付けしか持たない回想に過ぎず、参照時におけるある種の事象の原因あるいは理由とするためには、「経験」を参照時の状況と“直接的”に関連付けることが必要となるものと考えられる。その“直接的な”関連付けを可能とするものが“了₂”や“已经(已)”の働きであり、それによって、「経験」

は参照時と“間接的な”関連付けしかないものから“直接的な”関連付けを持つものへと移行する。

①について考える場合，“了₂”の定義を張晓铃(1986)から引用すると、「主に事態に変化が現れたこと、あるいは変化が現れようとしていることを肯定する。文終止の働きがある。」となっている。その定義に加え，“了₂”の特徴として以下仮説を提示してみる：

仮説(その二):“了₂”は文末に用いられ、それによって、同時に“文終止”に関わる。しかし、文中において「事態に変化が現れたことを肯定する」場合，“了₂”は“文終止”への関わりを回避するため、その位置を[V0了₂]から[V了₂0]へと変えることがある。

上記の仮説(その二)に基づいて考察すると、①②の“了”はいずれも“了₂”ということになり、文中、文末の別を問わず、それらは「事態に変化が現れたことを肯定する」働きをしていると説明できる。

③の時間副詞“已经(已)”は通常パーフェクト構文中で用いられ、ある種の事象が「既に」完了し参照時の状況に特定の影響を及ぼしていることを表す。この場合“已经(已)”の働きは、パーフェクト構文中において過去のある種の事象と参照時の状況との関連付けを強調することであるとも言える。そのことから類推すると，“已经(已)”は“过₂”と共起する状況において，“过₂”が捉える「経験」と参照時の状況との関連付けを強調・強化することによって、その関連付けを“直接的”なものに移行させる働きを持つことが推測される。その働きによって、コンテクスト中の必要性に応じて、「経験」と参照時との関連付けがなされ、それを踏まえた表現へと続けることが可能となるのではないか。

§3.3. “过₁”か、それとも“过₂”か

刘月华(1988)が“过₁”と“过₂”の意味を、それぞれ“完毕”(すっかり終わること)と“经验”(経験)“曾然”(かつてそのようなことがあったこと)と規定し、示した以下の事例に対し、劉綺紋(2006)は、意味による両者の区別はできず、その二つの事例に「意味の違いが感じられない。」と反論している。

・呆了一会儿，他出神地望着我，轻轻地说：“我可以叫你啊娟吗？”

“你已经叫过了。”我点着头说。(苏307)(ちよつ

とぼうとしてから、彼はうっとりして私を見つめ、軽く言った。「阿娟と呼ばせてもらえない？」「もう呼んだじゃない」私はうなずいて言った。、p. 248.

・“为什么?——我今早还说过，我愿意做你的朋友。”(曹92)(「なぜですって?今朝も言ったでしょう?私はあなたの友だちになりたいって。」), p. 248.

上掲の二つ事例が均しく完了して間もない動作に言及している点からすると、劉綺紋(2006)の反論は一見正しいように見える。しかし、その実、それら事例が言及するところは完了した動作の「有無」であり、本稿 §2.4. で指摘したように，“过₂”が“最近の過去”における事象の「有無」を“点”として捉えたものであると解釈できる。

§4.0. 最後に

本稿は専ら“过₂”について論じ、その見解をまとめたに過ぎない。“过₂”に限っても、“过₁”, “了₁”, “了₂”やその他関連語句についての個別の研究、並びにそれらの研究成果を基にした“过₂”との関係についての研究等、多くの課題が残されている。今後も、中国語のアスペクトについて体系的な研究が実現できるよう努めて行きたいと思う。

この研究は、沖縄キリスト教学院特別研究助成費を得て行うことができました。学院に感謝いたします。

注釈

- ¹ 吕叔湘主编(1980)《现代汉语八百词》商务印书馆, p216.
- ² 同上.
- ³ 出典は引用文の後ろに要約して示す。詳細については参考文献参照。原文が中国語のものは筆者日本語訳。
- ⁴ 「」内は筆者日本語訳。それ以外の部分は筆者による要約。出典の頁数はその後ろに示す。
- ⁵ 劉綺紋(2006)『中国語のアスペクトとモダリティー』大阪大学出版会, p. 29.
- ⁶ 「」内は筆者日本語訳、それ以外の部分は筆者による要約。出典の頁数は後ろに示す。
- ⁷ ()内は出典著者の引用した作家名及び文章名。出典著者は(著者作)とする。筆者日本語訳。
- ⁸ 中国語原文の後ろの()内は出典著者の引用した作家名及び文章名。日本語訳の後ろの()内は翻訳者氏名、表示がないものは出典著者による翻訳である。その後に後出典の頁数を示す。

す。

参考文献

- 王力 (1943・1944) 《中国现代语法》 商务印书馆
- 吕叔湘主编 (1980) 《现代汉语八百词》 商务印书馆
- 张晓铃 (1986) <试论“过”与“了”的关系> 《语言教学与研究》, 1, 48-57.
- 孔令达 (1986) <关于动态助词“过₁”和“过₂”> 《中国语文》, (4), 272-276.
- 刘月华 (1988) <动态助词“过₂过₁了₁”用法比较> 《语言研究》, 26, (1), 6-16.
- 房玉清 (1992) <动态助词“了”“着”“过”的语义特征及其用法比较> 《汉语学习》, 67, (1), 14-20.
- 劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティー』 大阪大学出版会

A study on Chinese “Guo2”

Tomoyoshi Takemura

Abstract

In this paper, first, we pointed out that “experience” was caught by “macroscopic viewpoint”, and then, showed a hypothesis about “experience” obtained through “macroscopic viewpoint”. And next, we learned about Chinese “Guo2”, and consequently, we found its grammatical function as follows: when the event time lies on the past with wide time range and narrow time range it refer to experience, and when the event time lies on the latest past it focus on the existence of completed operation or situation.